

令和2年度第1回ちば文化芸術振興懇談会

1 日 時 令和2年8月28日（金）午前9時30分～午前11時30分

2 場 所 千葉県教育会館 本館203会議室

3 出席委員

加藤 修 委員（座長）、鈴木 通大 委員（副座長）、草加 叔也 委員、小芝 一臣 委員、
椎名 喜予 委員、椎名 誠 委員、鈴木 勲 委員、永井 俊秀 委員、水越 雅信 委員 以上9名

4 議事の概要

（1）第2次ちば文化振興計画について

「令和元年度実施報告及び令和2年度実施計画」「市町村文化振興施策及び文化施設（劇場・音楽堂等、博物館）運営調査結果」について、「資料3～5」により事務局から説明。その後、各委員から意見。

【委員】

少し本題から外れてしまうが、自分自身が直面している課題に関して意見を伺いたい。「インターネットを活用した広報活動」に関する記載があるが、高齢者の方はインターネット・スマートフォンを使えない方が、少なくはなっていると思うが、まだ結構いらっしゃる。新型コロナウイルス感染症対策として、三密を避けるため、所管している美術館を完全予約制にしたが、予約ができないというお問い合わせがある。インターネットは若者には広まりやすいが、インターネットを使用できない方に対してどのようにしたらよいか、何かご意見があれば教えてほしい。

【座長】

確かに新型コロナウイルス感染症対策全般において、インターネットの使用が前提とされているように感じられる。義務教育における児童生徒向け課題等の配信においても、インターネット環境のない世帯のみに紙媒体での対応があった話も聞いている。使い勝手・緊急性・コストダウン等の意味合いは理解できますが、どこまでをインターネットとするかについては考えさせられる。

【委員】

自分は長い間、博物館の運営等に携わっているが、「インターネットと紙」の問題はいつも話題となる。所属していた博物館にインターネット（情報システム）を導入するにあたって、職員がパソコンの使用に対して抵抗があり、まずは職員を説得するところから始まった。情報システムは更新が早く置いて行

かれるところもある。地元の町内会に対しては、インターネットと同じ内容を紙でも知らせたりもした。ただし、紙には、いずれインターネットでのお知らせになると記載していた。日常生活に浸透させていけないといけない。

今、多くの方はスマートフォンを持っていて、本来的には情報をデータの共有・キャッチの能力は高くなっている。ただ、行事等を広報するには、インターネットと、ポスター等の紙を両方併用していることが多いと思う。逆説的だが、ペーパーレスのために会議資料を電子化したことで、電子データを印刷する人が多くなり、かえって紙代が高くなってしまいうようなこともある。目で追うには紙でゆっくり見るほうがよいところもある。電子での検索に慣れないといけないが。まとめると、当分は、インターネットと紙の併用は続くだろう。

【委員】

学校現場に従事する立場として申し上げますと、新型コロナウイルス感染症の影響により、インターネットで課題をダウンロードして提出するようにしていることもあるが、インターネット環境が全くない・プリントアウトできないなど、インターネットの環境が整っていない家庭が一定割合あり、そのような家庭には郵送で送るようにした。すべてをインターネットで済ませようというのは、まだできないだろう。郵送とインターネットの併用をしていくことになるだろう。

【委員】

地域の状況についてお話しする。持続化給付金等があるが、基本的に電子申請である。自分のいる地域では、電話しかないような高齢者の方が営業するお店が半分くらいいる。国には電子申請ができない方を対象として支援センターを設立して支援する動きもあるが、普段からそのような環境に慣れていない中小零細事業者はどうしたら良いものかと、多くの相談があり、具体的なお手伝いをすることにした。そうでないと早急に現金が入らず日々の生活に影響するため死活問題であり、メールアドレスのない方も本当に大勢いて、アドレスの管理のお手伝いも商工会議所で対応し、何か書類が足りない場合は一緒に考えるということとしている。今回の件で、地域では電子申請への対応がまだ厳しいとわかった。県の申請は電子・紙両方対応いただけたが、電子申請だけということはまだ難しいと思った。総合的に対応して、一緒に対応を考えてあげる窓口が必要と思う。博物館・美術館の予約等も、大変と思うが、電話でも受け付けることをしてあげると良いのでは。

【委員】

現計画は本年度が最終年度であり、今回の報告を受けての感想を申し上げる。県の文化振興施策の一覧があるが、重複はあるが140程度と、とにかくたくさん施策がなされていることに驚いた。県民生活・文化課をはじめ、県は文化振興に努められていると思った。また、膨大な資料を作り上げて、とりまとめて報告することは大変だったと思う。貴重な資料だと思う。

今回の報告は総括的なものであり、報告時間の兼ね合いもあると思うが、もう少し柱の一つずつについても説明してもらえると、具体的な形が見えてくるかもしれない。

資料3の実績報告を見ると、「〇〇を実施した」ということが主であり、柱の目的（環境づくり、価値の創出等）にどの程度近づいているかを示せるとよいと思う。数値上で示すことは難しいかもしれないが、全部が主観でなく、もう少し客観的に示せばよいと思った。

また、文章の表現も、「〇〇が大切です」「〇〇が重要です」と、どこか他人事のような、曖昧な印象を受ける。「〇〇していきます」等の言い切る表現のほうがよいと思う。

【委員】

全体を通して2点ほど申し上げる。資料3に示されている「この1年間に文化芸術にふれた県民の割合」は67.4%という結果となっているが、「文化芸術」をどのようにとらえるかが曖昧になっているのではないと思う。他の委員からも以前意見があったが、地域のお祭り等に参加すれば地域の伝統文化に触れたことにはなると思うし、スマートフォンで音楽を聴いたり、ゲーム音楽も文化芸術になりつつあるのでこのような新しいものにふれたりすることも含めると、本当にこの数値なのかなと思う。「文化芸術」をハードルが高いものを考える傾向があるが、敷居の高いものではなく本来は日常とともにあるものと考えているので、もっと数値は上がるのではと思う。

資料3において「事業を実施するための職員・予算が不足していて実施できないことがある」とあり、市町村文化施策調査結果においても「予算・人材・ノウハウ」の不足が課題となっている。地域差があり、東葛方面の比較的大きな市町村は、非常に色々なことにチャレンジして魅力的な事業もしている一方、県東・県南等の比較的小さな市町村は事業が固定化したものが多く、市町村格差もあるように思った。県もたくさんの事業を行っているが、県だけですべてを行うのは難しいので、市町村をどのように支援・連携していくかも課題だと思われる。県として考えていただければありがたい。

【委員】

自分が一番興味があるのは「人員と予算とノウハウ」という問題である。自分がいろいろなことに携わってきた中でも永遠の課題であるが、文化振興施策の実施において最も重要である。ノウハウは経験を積んでいけば蓄積できるが、ノウハウに伴う人員・予算は、博物館の展覧会等でも不足している。県はもう少し具体的に、どういう方法でこの問題を解決していくかを考えていかないといけない。永遠の課題だが、ここを一步乗り越えないと文化振興を進められない。

【委員】

「この1年間に文化芸術にふれた県民の割合」という指標がある程度順調に伸びていることは良いと思うが、関連して意見を申し上げる。インターネットを利用すれば色々な体験がバーチャルでできるが、実物を実際に見せる、その場の雰囲気味わわせるということを学校は大切に考えている。新型コロナウイルス感染症の時代だからこそ、現場で生の体験をすることが大切。博物館・美術館に実際に行く、半分は無理やり行かせることが大事。博物館・美術館で調べる課題を出したり、遠足で寄ったり、学校が博物館・美術館に行くような企画を作らないと、子どもたちは自発的には行かないので、学校としてはそのような機会を増やしたいと思う。予算の関係で3年に1回の学校もあるが、どこの学校も芸術鑑賞会を企画している。子どもにじかに触れてもらうためには、やはり予算の問題がある。入場料は申請すると無料となる施設も多くて助かるが、交通費用は発生する。県に援助等も考えてもらえると助かる。県高等学校文化連盟は県から補助金をいただいている。実際の運営は補助金以上に経費がかかっているので、会費等を徴収して運営している。十数年前から比べると年々減少していて、運営面はやはり厳しい。芸術文化の振興のため、県教育庁等は予算を検討いただけるとありがたい。参考として、高等学校でも体育連盟はもう少し補助金がある。

【座長】

現物を見ることは私も重要だと思う。新型コロナウイルス感染拡大防止のこの時期に、何を大切なものとして守っていくのかという課題に直面している。指標の数値を伸ばすためにはインターネットでの鑑賞を含めることの検討も考えられるが、「現物を見ないこと」を容認しそれが基準となってしまうことで、新型コロナウイルス感染症終息後、現物を見ることの価値が不明確になってしまうのではないか。この状況下、美術館等も限定的だが再開されてきたので、数値にこだわりすぎず、この状況下でどうやって安全に現場に導くかを考えることが大切なのではないか。

【委員】

今後もこのようなとりまとめを続けてもらい、もっと進化をしていってもらえればと思う。

資料3の「この1年間に文化芸術にふれた県民の割合」は目標70%であり、千葉県の人口は約630万人であるので約450万人が文化芸術に触れていることになる。すごいことだと思うが、そんなに文化会館等にお客さんは来ているかなと思う。乳幼児や入院されている方等がいるので、実際に行動できる人はもう少し限られるので、この数値は実態とあっているか微妙かなと思う。

柱の各成果指標について報告があったが、やはり定量化されている指標は目立ってしまう。数値が上がってきているからいいのかというわけではないと思う。例えば「文化会館・美術館・博物館の入館者数」は「文化芸術を鑑賞・参加・創造する環境づくり」という柱の成果すべてを定量的に示せるものになっているかという、若干違うと思う。柱には「創造」まで記載されているが、入館者数は創造することまでを代表する指標にはなっていない。人材育成・普及啓発等の数値も調査ではとっているようなので、これらを加味して評価を考えてはどうかと思う。

また、全ての成果指標で「令和2年度目標：増加を目指す」とあるが、状況を見て判断をしたほうがよいと思う。数値はきっと増えない、むしろ減ってしまうので、成果が達成できなかったということになってしまう。現場は頑張ってお客を取り戻そうとしているのに、そうなっちはかわいそうだと思う。高齢者の方は劇場等に行きたくても家族が危ないから止めているような現状なので、一方的に「増加を目指す」とせず、「事情を加味して検討していく」等にしてはどうか。

その他の柱についても、定量効果をしている指標が全体を代表する指標ではないので、書き方は考えてもらったほうがよいと思う。

東京2020大会については実施するかどうかは本当に分からなくなっているので、資料では大会がある想定で記載されているが、大会が実施されなくても「大会に向けて実施してきた beyond2020等の取組の実績・レガシーを生かしていく」という書き方のほうがよいと思う。

【委員】

資料5について「令和2年度は文化振興予算が増加した」とあるが、文化振興予算には施設改修費・維持費が入っていることが一般的であり、建物を建て替えると何十億と一気に上がる。よって、施設に関わる経費と事業に関わる経費は分けて集計したほうが、客観性が出るのではないかと。事業が増えていくということは文化振興施策が行われているということであるし、また、施設改修費が増えているということは投資が増えているということである。ただ、一緒に評価をしないほうがよいかなと思う。

資料5には長寿命化計画についても記載があるが、総務省から当計画を策定するように通知があり、本来は今年の春で策定期限が切れているが、全国的に文化施設の策定はあまりできていないのが現状である。県内市町村でも約2000万円かけて計画を作るようなところもあったと思うので、熱心に着手しているところとまったく着手していないところの差が大きい。計画策定は施設設置主体の業務で指定管理者の業務ではないので設置主体のやる気による。国指針に沿ってやることもよいと思うが、なかなか簡単にできる問題ではないので、この程度の数値になるのかなと思う。

最後に、県が文化振興計画を策定して、このような調査により、データでエビデンスをしていこうというのはすごくいいことだと思う。今回のような膨大な資料もあるので、指標をエビデンスするための調査となるよう、今後さらに工夫をしていただければと思う。

(2) 千葉県文化芸術振興基本計画（仮称）骨子案について

「資料6」により事務局から説明。その後、各委員から意見。

【委員】

基本指標「この1年間に文化芸術にふれた県民の割合」について、450万人の人が文化会館等に来ているかと問われれば来ていないように思う。しかし、文化芸術は生活の一部であってほしいという願いがある。例えば、テレビの絵画番組等を見て美術館に行きたいという入口があってもよいと思う。現場で見るのが一番良いと思うが、どういう形であれまずは文化芸術に触れられれば良いかと思う。「オンライン配信」という形もやむを得ないと思うが、現場・オンラインは方法の問題で、どちらが良いどちらが悪いというものではないと思う。

【委員】

他県の博物館等も視察したが、神奈川県等は一日過ごせるような設備がかなり整っていて、県内博物館は失礼ながら、少し物足りない印象であった。建物の建て替えは費用が大変かかることだと思うが、施設の中身のリニューアル等を図ってもらいたいと思う。

【委員】

当懇談会の委員に就任する前、正直、自分は一般的な生活の中で、文化芸術に触れてきたという意識はあまりなかった。そこで、柱4「次代を担う子どもや若者がちばの文化芸術にふれる機会づくり」が大

切ではないかと思う。通常、会社勤務をしている方等は、文化芸術にしっかり触れる機会を作ることはなかなか難しいが、授業の中に組み入れるなど、本物を見せてもらえる体験を学校が作っていくと、大人になったときに芽生えやすいのではと思う。子どもの時にたくさん触れる機会がある方が、大人になっても継続しやすいと思う。

先日、他県の県立博物館に先日訪問する機会があったが、千葉県にはない、文化芸術のシンボリックなものがあった。また、千葉県は劇・音楽等を体験できる場所が東京都等と比べて少ないように思う。

小さな時から文化芸術に参画できる機会を作っていく、将来的には、千葉県は文化芸術に力を入れていると言われるようになればいいと思う。

【委員】

事務局の説明の中で「オンラインを課題に含めてもよいかどうか」という発言があったが、やはり含めるのが適当でしょう。ただし、「現場に行くこと・本物を見ること」と「オンライン」は、将来的には価値が変わるかもしれないが、「オンライン」の鑑賞は分けてデータを取ることができるとよいと思う。

一つお願いがあって、現計画では柱1「文化芸術を鑑賞・参加・創造する環境づくり」で「創造」という言葉があったが、新計画では消えている。文化芸術にとって「創る」という行為はすごく重要なので、「創造」という言葉をどこかに残してもらったほうがよいと思う。創ることを通して、その経験値によりステップアップしていく。

【座長】

若いうちに現場で体験する機会を作ることは重要と思うので、ぜひ県でも考えてほしい。大学生になっても美術館に行ったことがない人もいる。本年度は難しいが、都内の美術館やギャラリー、県内の DIC 川村記念美術館等に実際に赴き鑑賞する授業を例年開講しているが、できれば義務教育などもっと早い段階で現物に触れるきっかけがあるべきだと思う。美術館という施設は展示内容が短いサイクルで掛替えられることが前提となった発信力の高い場所で、外観が変わらなくともある意味いつもリニューアルしているような特殊性を持つ。県にはその時代に対する提案性の高い企画内容を考えていただきたい。また、東京2020大会の実施は不透明だが、beyond2020 プログラム等で培ったネットワークはぜひ残してほしい。たとえば「ちばアート祭」の絵画・写真の展覧会は本年度も実施されたが、あらゆる人々が参加できる貴重な機会となっていた。仮に大会が中止となった場合でも、残していただきたい「つながり」の1つである。

【座長】

基本指標「この1年間に文化芸術にふれた県民の割合」の算出方法を確認したい。「文化にふれなかった割合」については、「未回答」の人数は全回答者の母数に含めないのではないか。

【事務局】

現在の算出方法は、全回答者から「文化にふれなかった人数」と「未回答の人数」を全回答者から引いており、母数には未回答者が含まれている。

【座長】

未回答の数値を母数に含めるか否かで、触れた割合の数値そのものが大きくずれると思う。

【事務局】

数値の算出方法は適宜検討していく。

【委員】

新型コロナウイルス感染症の情勢が今後どうなるかはわからないが、オンラインで触れることを含めることは、確かに良いと思う。

また、新型コロナウイルス感染症により移動が制限されていて、特に幼児や高齢者は地域内でしか移動できない状況であること、その一方、千葉県は広く地域によって年齢層が多様であることを考えると、年齢層に合わせた取組を新計画にも入れてあげると、新型コロナウイルス感染症の状況下でも文化に触れる機会を提供できるのでないか。よって、新計画では年齢層や地域も考えてはどうか。

なお、個人的には、「5つの視点」に「アイデンティティー」があるが、これだけカタカナの単語であり、他と比べて少し唐突感がある印象であった。

【委員】

「あらゆる人々が文化芸術に触れる機会」として、ぜひ、「質の高いもの」に触れる機会を提供することを念頭に入れてもらえればと思う。ただやればよいというのではなく。

「具体的な施策」としては「評価可能なもの」であるとよいと思う。その観点を踏まえて施策を立案いただければよいと思う。